

Hautklinik 研修



研修医 2 年 吉田由香

今年からスタートした研修医 2 年目対象の海外研修に参加させていただいた。行先はドイツの南部、Friburg 大学病院の皮膚科だ。書きたいことは色々あるが、研修医の私が海外研修をどう過ごしてきたかご報告させていただくことにした。

慌しく準備をすませ、ドイツへ出発したのは 2008 年 1 月 3 日。英語もドイツ語も怪しいものでとにかく準備不足はひどかった。到着後に寮で生活の準備をしながら明日からどうなるのかなあという思いでいっぱいだった。

研修 1 日目、朝ふと思う。…何を着て行こう？白衣？スーツ？迷っているうちに「だいたい私が白衣を着てこの病院へ入っていいんだろうか」なんともいえないおこがましい気持ちがかみ上げる。とりあえず白衣はバッグへ、皮膚科の教科書を一冊持って出動した。

朝 7 時 45 分、外は夜明け前で真っ暗だったが待合や廊下で患者さんがたくさん待っている。8 時ちょうどから外来や検査などすべての業務が始まるのだ。”Morgen!”とちょっとまだ口慣れないあいさつを交わしながら外来の奥へ進む。

私が研修させていただいたのは Hautklinik(無理に訳すと皮膚科病院?)という地上 4 階地下 1 階の病院で、大学の皮膚科部門ということになる。医師は 20 数人、白い内装が美しい築 100 年以上の歴史ある建物だ。天井が高く、現代的に、また機能的に作られており古さは感じなかった。

先生方の部屋へ着く。外来を見学させて頂く女性の先生にお会いする。すごく顔が小さい。挨拶をしコーヒーを頂いていると「白衣はある？」と不意に聞かれた。「もちろん持ってきました!」「着ていいよ。外来がはじまるから」ここで白衣を引っ張り出す事ができた。着ていいんだ。とすごく安心したことを覚えている。

外来が始まった。Hautklinik の外来は、日光をたくさんとりこめる明るい個室だった。医師が患者さんをドアを開けて迎え入れ、握手をすることで診察が始まる。尋常性乾癬、扁平上皮癌、多型紅斑、悪性黒色腫…。様々な患者さんがそれぞれ事情を抱えて受診

してくる。やりとりはもちろんドイツ語であり話からの内容把握は困難だ。皮膚科疾患なので視診でなんとか(本当になんとかだが)problemの見当をつけることができた。そして先生が英語で背景など説明してくださり、私も昔習ったドイツ語を引っ張り出し患者さんともコミュニケーションをとることができた。

外来研修を約1週間行ったあと手術室研修が始まった。手術室はHautklinik内に3部屋、レーザー治療室が3部屋ほどある。全身麻酔を要するものから生検まで1日約30件の手術がある。参加したいという意志を伝えると毎日手洗いで参加させて頂くことができた。指示を聞き漏らさないように気を付けていたが手術が佳境に入ると英語にドイツ語が混ざることがよくあった。理解できなかつたらその旨を伝えないといけない。常に緊張していたように思う。皮膚科疾患の他、下肢静脈瘤ストリッピングなどの症例も多くとても勉強になった。それ以上に自分が参加しているという嬉しい気持ちでいっぱいだった。

その他、Tagus klinik(自分なりに訳すと「日帰り治療センター」)やアレルギー専門部門、melanoma 専門部門で研修をさせていただいた。

また Hautklinik 以外で小児科病棟に1日、麻酔科に1日見学を許していただいた。

どこの部署へ行っても同じだったが、先生方は「何か分からないことはない？」と常に気にして頂いていた。私のひどいひどい英語に辛抱強く耳を傾けて下さり、またていねいに教えていただいた。たまたま質問がないと「本当に!?大丈夫!?’とすごく心配される。という訳で見学しながら手を動かしながら私も常に英語で質問を考えるということが多くなった。結構必死だったように思う。そして慣れたころに1か月目となった。ふりかえれば「あっという間」であり、間違いなく貴重な経験になったと思う。

最後になりましたが、研修中にも関わらず様々な面でサポート頂いた上、快く私を送り出して頂いた川崎医大皮膚科の先生方やスタッフの皆さんに心から感謝いたします。ありがとうございました。